

1. 寄 稿 文

この文は、ラブリバー活動交流講演会（平成元年7月27日開催、リバーフロント整備センター、河川環境管理財団共催）での記念講演をもとに、加筆・修正していただいたものです。

川を愛する心

筑波大学教授 椎貝 博美

きょう3時から表彰式など全部拝見させていただきまして、ただいま、代表のお話も伺ったわけですが、いずれも創意工夫をもってきめ細かにラブリバーという制度を生かし、また地元の特色を生かした実践の状況をお聞かせいただきまして、大変に勉強になりました。

御承知のとおり、現在河川に対する関心が非常に高まっています。私は、若いころから、水問題をずっと取り扱ってきておりますが、まだ逆川のように災害を受けるところもあるわけです。このように河川に対する関心が高くなってきた結果、このごろは川を愛しよう、ラブリバーですね、というところまで高まってきたということでありましょう。

まず、愛するということについて少し考えを述べたいと思います。

これだけ日本で河川に対する関心が高まったということは、実は我々の生活が満ち足りて、失っていたものを取り戻そうとしているのだというような考え方がありますが、果たしてそうでしょうか。

よく我々日本人は、自然に対して特にすぐれた感覚を持っておって、それが俳句や和歌にあらわれる、我々は非常に自然に対して、感受性が高い、そういうふうに学校でも習いますが、果たしてそうかという気もしないわけでもございません。

非常に簡単に考えれば、ラブリバーというのは当然だということになるのですが、けれども、気をつけませんと、それが10年後、20年後になって正しくなかったといわれても困るところもございますので、そこのところも考えてみたいと思います。

愛するというのは大変便利な日本語でありまして、例えばだれか女の人を愛するというときにも使いますし、それから総理大臣が、私は限りなく日本の国土を愛しております、というようにも使うことができます。もちろん河川愛護という

ような使い方もできるわけです。みんな愛するという言葉です。

しかし、それぞれの意味は、少しずつ違ってきておることが感じられると思います。今、我々が愛すると言っていることは、ほとんど好きだということでき換えることができます。私は、関東の生れでありますから、東京が好きだとか、東京が好きだと言っても、東京を愛しているのだと言ってもこれは大体同じ意味になります。

ここで古い言葉を考えてみますと、昔の人は愛するという言葉をもっと複雑に使っていたように思います。まず、「愛しい」と書いて「かなしい」と読ませるのが万葉集などにたくさん例があります。かなしいというのは、今私達が、こういふことがあって悲しい、残念だとかというような形でしか使いませんが、万葉集をごらんになりますと、川のことだけ詠んだ歌がたくさん集まっていて、ここではかなしいという言葉が非常に多く使います。「かなしき子が」というと、これは、この子を見ると悲しくなるのではなくて、今の言葉で言えば、かわいらしいという言葉に置きかえられるかもしれませんが、どうもよく見ると、そうではないようです。

国語の先生は確かに「かなしい」とは、かわいらしいとか、愛らしいとかいう意味だとか言われますけれども、それは今の日本語に直してしまうからそうなるわけで、どうも、心を強く動かされることが、「かなしい」の意味のようです。

ですから、きれいな女の人を見ても、いとしいと思うこともあるかもしれませんが、それでも、「かなしい」と思うこともあります。大変にきれいな人だと思えば、心が動きます。

万葉集の川の歌を集めたところを見ますと、「ずっと昔から聞かされていた、吉野の川のせきの前に今立っていて、今自分は吉野の川のせきを見ているのだ」という非常に感激した歌が幾つかあります。それに類した歌はたくさんあって、はやったのかもしれませんが、昔でも、川の河川構造物を見るというのは、大変に心が動かされるようなことであつたようであります。そういう意味で「かなしい」という言い方をいたします。自分の子供に対しても、「かなしき子ら」という表現を使っていて、これはかわいらしいよりももうちょっと強い意味

であります。どうも自分の子供を見ていると、自分の心が非常に動かされるというので「かなしい」という言い方をします。

そうかと思えますと、「いとしい」という表現もあります。「いとしきいもこ」だとか、「いとしき子ら」とかという言い方もございます。もちろん関西の方が日本で歴史が古いわけですから、「いとはん」なんていう、非常にしゃれた表現で残っております。

この「いとしい」というのは、「いと欲しい」ということで、この「欲しい」というのは、今の欲しいというよりは、もっと抱きしめたいというような感じなのです。自分で、手で触ってみたいというような感じの心もちがいとしいなのです。

それからもう一つ「いつくしむ」これも「愛しむ」と書いて「いつくしむ」と読むのです。これも愛するの一種なのですけれども、これは「美しい」から来しました。「いつくしむ」というのは、「うつくしむ」なのです。「美しい」は文法では形容動詞ですけれども、実はそれが動詞にも使われたのです。ですからちゃんと「愛しむと」書いて、「いつくしむ」と万葉集では読ましております。

それから、古い言葉ですけれども、「かわゆい」という言葉があります。これはかわいいという意味ですが、これは、さっきの「かなしい」と同じように使われているようで、やはり心は激しく動かされるということでもあります。今でも「かわいそう」と言うと、かわいそうなのです。ところが、「かわいい」というと、かわいらしい、美しいになるのです。どうもそういうところに、「かなしい」という言葉が残っているようです。

今の若い学生さんたちは、この「かわゆい」という表現をよく使います。古語を使って、ちょっとしゃれた感じを出そうというのでしょうか。今はどういうふうに使うのかというと、美人の先生があらわれると、「あの先生はかわゆい」という言い方をするわけです。かわいいというと、何か自分より年下じゃなければいけないので、年上のお姉さんみたいな人は「かわゆい」と表現いたします。

もっと直接に「こいしい」という言葉がありまして、私はあなたを愛しておりますというふうな意味で使うときは、「恋しい」という言葉を書くのです。現在

だと恋愛関係で、恋しているという表現があるわけですがけれども、昔の「恋しい」というのは決してそうではなくて、愛しているという意味が強いのです。

昔といっても江戸時代ですけれども、江戸時代には、「恋女房」という言葉がありまして、どうも辞書では、これは恋こがれて一緒になったおかみさんというのが恋女房だとして書いてありますけれども、そうではなくて、「今でも愛している奥さん」ということです。

それでは江戸の人は自分の奥さんは愛さなかったのかというと、そういうわけではないのですけれども、どうも新婚時代と同じように愛していると恋女房だといってみんなでからかったということです。あいつのおかみさんは恋女房だぞというようなことをいってからかっておった。どうも夫婦仲が大変よろしいというのを男の方から見て恋女房というこういう言い方をしたわけです。

ついでに申し上げますと、関西では、明治以降になってから、「こいさん」という言い方があるのです。これは「恋する」の恋さんかなと思っていたら、そうではなくて、「いとさん」に、これはお嬢さんのことですけれども、それに小をつけて、小さいいとさん、小いとさんがこいさんになります。つまり末のお嬢さんというようなことなのです。今はかわいらしいお嬢さんのことをこいさん、こいさん、とこうやりますが、明治の使われ方は、末のお嬢さんのことであります。

これだけ愛するという言葉にいろいろな広がりがあるわけです。ですから川を愛する、とか、自然を愛する、とかというところは、今の言葉では愛するでいいのですけれども、突き詰めて考えると、古語でいう「かなしい」という言葉にピッタリするのではないでしょう。

川というのは、いつまでも我々の生活の中にあるものですから、そのつき合い方がどうもかなしいという、これは川を見ると悲しくなっちゃうという意味ではなくて、何か心が動かされるというようなところで、つき合うと私はうまくいくのではないかなと感じます。

そうしますと、我々が自然を愛するということはどういうことかということ、少し考えてみなくてはなりません。

余り日本の川をごらんになっていないで、新聞、雑誌のみで知っておられる評

論家の方には、日本中の川はコンクリートで固められてしまったという表現を使われることがよくあって、私はこれはけしからんのではないかという気がいたします。決してそんなことはないと思いますけれども、いずれにしても日本の自然というのは、かつてよかったのか、今でもよろしいのか、外国の自然に比べて劣っているのか、それとも優れているのかということを少し分析したいと思います。

日本は季節の区切がはっきりとしています。大変に美しい春と秋があって、暑い夏があります。夏の盛りに今真冬だなと思う人はありません。夏はちょうど熱帯地方なみで、湿度も高いのです。冬はかなり寒くなりまして、関東の方ではそれこそ乾燥して寒さが倍加します。

それから降水量、これは何で水という字を使うのかといいますと、雪やあられで降ってくる量も、雨の部類に混ぜますから、降水量という言葉を使うのですが、年間に1600ミリぐらいですから、1メートル60センチぐらいつもののです。ですけど、これは実は温帯地方では大変に珍しい大きな値でありまして、熱帯地方なみの多さです。

裏日本にまいりますと、これは降雪量が大変多くて、ちょっとしたところでも1メートルありますし、山の方に入りますと6メートルとか7メートルとか降るところはざらで、そういうところに平気でかなり大勢の人が住んでいます。雪が6メートルもあるところに平気で大勢の人が住んでいる国というのも、これは世界ではほとんどありません。もちろん、日本よりもっと寒いところで、氷の上に住んでいるという人はありますが、大雪の中に住むというのは大変なことなのです。これは世界記録だと思います。日本ではそのぐらい夏と冬というのは判然と違うのです。

ところが、夏から秋にかけての変化というのは、ちょっと微妙なところがあるのです。いつの間にか、秋になったなというようなところがありまして、ここら辺が日本人の季節感の大変にしゃれたところであって、いや暑い暑いと思っていたらコスモスの花が咲いておるぞというようなことで、秋だということがわかるのです。

それから、冬から春にかけての変化というのも、これも大変微妙です。うぐいすが来たとか、梅の花が咲いたとかというところで、これは、春になったのだと考えるわけです。陳舜臣という中国の作家の方が書いていることですから、これは中国人から見た日本人の見方ですけれども、どう日本人というのは、それほど自然感にすぐれているとは思われないと言っております。ただし、日本人というのは、妙に心に余裕があるところがあって、どうもふと見た自然に心を一瞬奪われるということがあり、これは大変な美点だと言っております。

例えば、身代限りをしそうになって、弱った、弱ったと言って川にでも飛び込もうかと思って歩いておって、川のところまできたら、川を見たらあまりきれいなので見とれて飛び込むことを忘れてしまったという具合です。道を歩いていたら、ちょっと道端にきれいな花が咲いておって、それを見ていると苦勞していることを5分ぐらいは忘れてしまう。何かこうずっと気分がさっと横にいくというところが特質のあるところであり、俳句だとか、和歌だとかというのは、どうもこういうところに生まれるのではないかというのが、陳舜臣さんの意見であります。

なぜ、こんなことを言うかといいますと、私は、日本人の季節感というのは、そういうふうにふと心の動くところが特徴なのであって、そんなに季節に敏感な人種ではないのではないかなという気がするようになったからです。

私は暑い国に6年ほど住んでおりまして、何か1年中30度から40度近くありますので、暑いなこう思っているわけですが、そういうところに日本の国文学の先生が来ると、大変にがっかりされたり、中には怒り出す人もいます。「どうもこういう暑い国の人には、俳句のよさというのがわからんのでけしからん。」と言われるので、そんなものかなと思っておりますと、実はそうではないのです。どうも暑い国の方は、今35度であるか、33度であるか、というところで季節の変化を感じているらしく、これはずっと日本人より微妙なところがあります。ああ今ドリアンが出てきたかということで、そうすると6月かと、こういうことになるのです。今度はラムヤイといって、竜眼肉と日本でいうわけですが、これが出てきます。そうするとドリアンの季節が終わったかな、というところ

で、タイの人とだんだん話ができるようになって聞いてみると、春、夏、秋、冬と、こうは思わないで、1年をやはり8種類ぐらいに分けて暮らしているのです。今こういう季節で、今こういう季節だというようなことで、そうするとどうも俳句なんていうのは、だめだとはいいませんけれども、なるほど1年を、4通りに分けるのと8通りに分けるのでは、これ8通りに分ける方が難しいかなという感じがするようになりました。

タイの人にこれを話して見ますと、タイの人は笑って、「いやアジアの国は、みんなそうじゃないのか。」と言います。どういうことかということ、「実は、タイでは、タイ人が一番自然に対して敏感だと教わっている。中国人もみんなそう思っている。日本人もそうだろう。だれが本当かよくわからんけれども。」と言って、どうもアジアの国というのは、教育をするときに自分の国が一番すばらしいというふうに教える習慣があるらしいということをおっしゃいました。

そんなものかもしれませんけれども、日本の季節感は微妙な季節感というよりは、どうもくっきりした季節感ではないかという感じがいたします。ただし、その中で微妙に変わったところを、うまくとらえると、それが文学になったりするということがあります。

川でもそうだと思います。特に先ほどいろいろな例で川をきれいにするということがありましたけれども、どうも川がきれいかどうかというのは、もちろん水がきれいであることが大切ですけれども、川の周りがきれいかどうかというのは突き詰めてみると、どうも空き缶が一つ落ちてるか、落ちてないか、吸い殻が一つ落ちてるか、落ちてないかぐらいの差だと思います。

これがどうも一つ空き缶があると、いや余りきれいじゃないなと思いますし、それから何も見えなければ、あっこれはきれいだなというふうな感じです。カナダの山岳レンジャーの話を聞きますと、やはりカナダ人も同じように思っているようです。

まあそうカナダの山の中で、木を無断で切って盗もうというやつはそんなにはおらん、木も大きくて、木を切り倒しても引いていけないし、熊も出てきて結構こわい。むしろレンジャーというのは、ゴミを拾っているようなものだ、とにか

く一つの吸い殻を、見落としておくと、次の週には、10個になってえらいことになる。だからとにかく1個の吸い殻を拾うということは、将来の10個を拾う、あるいは100個を拾うかのようで、一番の省エネルギーだ、ですから、年がら年中歩いては、ゴミを拾っているようなものだ、またゴミを拾うことによって、ゴミを見ることによって、やや汚れそうになっているのか、それともきれいになりつつあるのか、それもわかってくる、というのです。

確かにこれは私らも、いろいろなところで経験するわけで、まず汚くしないということがどうも大切なことのように思います。

もう一つ、さっき川を見て心を動かすといいましたけれども、吸い殻が落ちていたら、アッと心が痛むというところであればいいわけです。私は、茨城県に住んでおりますので、「那珂川流域問題連絡協議会」というのをもう10年ほどやっておりまして、これは、いろいろ事情がございまして、私は早く栃木県の方にも入っていただきたいと思っていたのですが、残念なことにちょっと力が足りなくて、昭和61年の大水害のときまでは間に合わなかったのですが、建設省を中心に、毎年3回ぐらい集まって、いろいろ水害対策なんかを練ってまいりました。

那珂川というのは大変きれいな川で、それこそカヌーが好きな人だったら、幾らでも上まで上がれるような川であります。もちろん下流の方でも、それぞれ小学校の子供さんやなんか、ゴミ拾いなんかしていただいているわけです。私がそういう若い人に向かって、「あなた方は、那珂川ではゴミを捨てないかもしれないけれども、どこかよその川に行ったら、捨ててないか。」と聞いたことがあるのです。「いや実は捨てかねないところがある。どうもやはり自分の川のところはきれいにするけれども、旅行にいくと車からちょっと吸い殻を捨てちゃったり、そういうことをしないわけでもない。」、そうすると「やはりそれはまずいよ。」と私が言うわけです。自分のところはきれいにするけれども、よそは余りきれいにしないと、これは余り感心しないところがあります。

多少、今どうしても観光地になっているような川のところは、そういう被害もございまして、一人一人の方が自分の近くの川をだんだん汚さなくなっていると

思いますけれども、よそに行くとき汚さないかという心配があるわけです。これも考えなくてはならない問題だと思います。

さてこのようにいろいろ考えてきたわけですが、今日は川を中心にして皆様お集まりになっているので、川というのは、どんなものかということを考えたいと思います。川は川ではないかというわけですが、どうして日本人は川という心が動く人が結構いるのだろうかということを考えてみたのです。

これは好き嫌いはあるかと思いますが、演歌で考えますと千曲川の歌だとか、知床旅情だとか、北上夜曲だとか、いろいろ川のことを歌った歌がございます。それで、必ずしも北上川をごらんになった方は多いわけではありませんが、それでも北上川の歌をうたうときにはひとつのイメージをもって歌うように考えられます。

川が流れておりますと地域が二つに分かれてしまいます。日本は川が県境になっている場所が結構多いわけですし、川は県境にならなくても町の境だとか、市の境だとかということによくなるのです。

大陸ですと、川は国境を形成いたします。川によって国が分かれているという例は大変に多いのです。皆さん御存じかと思いますが、メコン川という川がありまして、これは東南アジアで大きい川のひとつですが、ラオスとミャンマ、昔のビルマとの国境をつくりまして、それからタイとラオスの国境もメコン川がつくっています。

このメコン川というのは不思議な川で、上流は中国にあります。ですから、中国でもメコン川にダムはかけないということになっておりまして、うっかりダムをかけますと、下の国に迷惑をかけるので具合が悪いのです。

ヨーロッパだとライン川が、ドイツとフランスの国境をつくっているとか、そういう例はたくさんございます。これは川が地域を分断するからこそそうなるわけです。では分けるだけかというと、不思議なことに、大概物事はその裏の作用ももっていて人と人とを結びつける働きをするのも実は川なのです。

それはなぜでしょうか。例えば人が川に橋をかけるとします。そうすれば交通がみんなそこに集まってきます。そこで重要な役目を世界の歴史の上で橋が果し

てきます。何も橋をかけなくても、川に行って水を汲むとか、川で渡しを待つとか、そういうところでは、必ず人が集まります。そこは人の出会う場所になります。

さらに川の周りには集落ができます。集落ができるということは川が今度は人を集めるということで、分断するのに今度は結びつけるという作用を川がいたします。

川がありますと、人が仲よくなることもあります。そしてドラマも生まれます。現在でも川をきれいにしようといえ、皆さん方が応じてくれて、多分そういうときには、私の経験から当たっていると思いますが、恐らく地域の人々も何となく仲よくなるに違いないのです。

そういうところはおもしろいもので、交通に限って言えば、川が分断してしまうから、川を何とかして渡ろうとすると、今度はそこがかえって出会いの場所になったりします。触れ合いの場所にもなっていて、そういう意味で川というのは、大変におもしろいものです。

さらにいえば川が渡れなくても、橋がかかってなくても、川岸へ行って向こう岸を眺めて、あちらはどうなっているのかと考えるのも出会いのひとつであったということになるかもしれません。

もし川がそこになれば、歩いて行けるわけですから、行って見てしまうということで話が済んでしまうわけですがけれども、川があるために向こうの土地へ行ってみたいという、そういう願いが生ずるのではないかと思います。そういう出会いとか、願いが生じますと、今度は思い出がつくれます。川の演歌を眺めてみますと、どうも思い出みたいな風景が多くこれは日本の演歌の特徴だと思います。

皆さん方が、どこかの川の歌を歌っているときには、必ずしも北上川とか、利根川だけではなくて、自分のご存じの川の情景を思い浮かべているかもしれません。しかし北上川を知っている人が北上川の歌を歌えば、自分の頭にもう一度、北上川との触れ合いが生じます。ですけれども、演歌というのは日本と韓国独特のものでありまして、万国共通の心になるかということと必ずしもそうもいえない

いと思います。

さて今日、日本の河川工学というのは、正直に言いまして世界的な規模で第1級といって間違いではないと思います。ですから、ここでもう少し、世界に通じる見方というのをほしいと思います。

それは上下流問題だと思います。川は不思議なことに分けた地域をもう一度つなぎますが、実は上流と下流もつないでいるのです。

ある川の上流部にあるか下流部にあるかで県によって川に対する考え方が大分違います。また、茨城県の方は少しのんきなところがございまして、利根川にはダムがたくさんできておりますので、茨城県は利根川に関しては洪水から安全になったわけですが、どうもダムなんてない方がいいのではないかなというように言われる方もでてまいります。それはそうではないと私は申し上げているわけであります。群馬県の利根川の上流部にダムをたくさんつくって、東京都とか茨城県とか、千葉県の洪水を防いでいただいていることをつい忘れるわけです。しかし、最近ではいろいろな川で、上下流の連絡を取り合うようになりましたので、私はこれも大変にいいことではないかと考えます。

といいますのは、外国で仕事をしてみますと、国と国との間では上流と下流との関係が一番大切なのです。例えばメコン川というのは、先ほど申し上げたように、中国から流れてきてビルマ、ラオス、タイ、ベトナム、カンボジアを通過して、海へ出ますから、全体的にうまく計画を立てることができません。しょうがないから国連でメコン委員会というのをつくって、一生懸命やっているわけですが、もう一つはかばかしく行きません。それは、中国でダムが欲しいなと思っても、どうも下流の具合が悪くなるのでは簡単にはつくれません。

タイの方でメコン川があふれてきて大変困るので、堤防つくりたいのだけれども、向こう岸はラオスになりますから。ラオスの方はお金がないのでどうしたらよからうということも生じます。タイの方だけ防ぐと、今度はラオスの方に洪水が出ていくようになりますのでそれもできません。結局タイの方も自分だけでつくるといことはしないで、よその国にもお金を出してあげて、堤防をつくっていくという共同作業をしなくてはなりません。そういう意味では川による連帯感

というのは大変なものであります。

実は川に対する要望というのは、日本では多様化してきております。大体において洪水を防ぐということは、これはとてもお金のかかることですし、技術の要ることでもありますから、国とか、県とかというところが手助けをする必要があります。

一方、水をきれいにするということは地元でもできることで、それぞれ努力をしておられ私も感心しておりますけれども、これが、実は場所によって表現が多様化してきます。災害を受ける人はほかのことはほっておいてもいいから、もっと安全な川にしてくれということがあると思います。水を使う立場になる人は、もっと水をきれいにしてほしいということがあると思います。それから水遊びが好きな人は、もっと川に近づきやすいようにしてくれということもあるでしょう。

これは、いろいろな考え方のひとつかと思いますが、自動車で直接川のそばまで行けるようにしてほしいという要望も結構あるのです。川のそばで野球とか、テニスとかをやりたいという人もありますし、駐車場が足りないから川の中に駐車場をつくらせてくれというところもあります。ここいら辺が、少し前まで大変に混乱しておったと思いますが、幸い住民の方の理解が大変に進んだということと、意識も高まったということが理由だと思いますが、それに県や市町村、建設省の努力によって、だんだんと共通の理解ができてきたのではないかと思います。

確かに何も起こらないときは、どうも川の、災害はもうなくなったのではないかというような考えがおきますが、理論上考えてみると、いつ災害がくるかわからないことということであります。災害が減ったからかえって住民が川のことを忘れてしまったということがあるかも知れませんが、僕はむしろ逆であって、災害が減ってきたからこそ、一度災害が起これば、災害というのはやはりすごいものであったということがクローズアップされてくるのではないかと考えております。

それだからこそ川に対する関心がふえてきたということがあると思います。それは、年がら年じゅう洪水に遭っているようなバングラデシュにまいますと、

水自体は大変きれいなのです。これはなぜかというと、まず家庭排水というのが、そもそもきれいでありますし、ごみがほとんど出てこない。それから空き缶なんか捨ておくと、これは資源ですからだれか拾って持って行ってすぐ何かつくってしまうということがありますので、全くごみが出てこないということになります。従いまして、そういうところでは、水はきれいであります。ただ災害が非常に多いのです。

それから、今度は非常に自然に恵まれたタイの山奥あたりの、人がほとんど住んでないようなところに行けば水がきれいかということ、必ずしもそうではありません。これは不思議なことでありますが、ジャングルから流れてくる水というのは割に汚いものです。それはジャングルでは常に物質の新陳代謝をしていまして、微生物の量も多く、葉っぱなどが落ちてくるとすぐ分解して、川に流してしまいます。そうするとそれがBODつまり川の汚染指標になりまして、必ずしも汚れているわけではないのですけれども、BODでいえば結構汚れたことになり、日本の都市河川ぐらい汚れている川もあります。

そういう川の水を飲むとおなかをこわしたりしてえらいことになるわけですが、このように人がいなければ必ずきれいかということ、そうでもありません。人がいなくても、生物活動が多ければ水は汚れてくるということがございます。

このようにいろいろなケースがあるわけですが、日本では私は正解だったと思いますが、とにかく、災害を防ぐというところから入って行って、それによって経済成長も行い、ここでいろいろ川のこともについてもう一度見直す機会を持つようなことになったのではないかなというふうに考えます。

年がら年中洪水でやられているとしますと、恐らく資産の集積もできないから、経済成長もありませんし、人口もふえないで、水はきれいであったかもしれませんが。そのかわり、日本人の平均寿命はやはり40歳だったかもしれず、いろいろ難しい問題が起きたはずで。

何が本当によかったかというのは、これはお釈迦様でもなければわからないのですが、とにかくこれが日本のたどってきた道なのですから、これで今治水に手を抜くと、環境まで一層悪化をしかねないわけですから、治水のレベルを

落とさずに、余力を持って環境をよくしていけばよろしいのではないかとというように考えております。

ただ、余りに多様な要望を川に投げかけますと、川は「家畜化」してしまって、悪くするとペットになってしまいます。例えば、水遊びもできる、子供も絶対におぼれない、それから景色はきれいで、野球もできて、魚もたくさんおってという、どうもそうはならないのです。

これはふるさとの川で、もうご存じかと思いますが、昔は川に行っても遊び道具は何もなかったのです。そういうものが何もなかったからこそ、バッタも多かったし、フナもいたし、メダカもいたのです。

ただ、私利根川筋で随分小さいころ釣りをやっておりましたが、どうも昔の方が鯉なんかは少なかったのではないかとと思うのです。今の方がはるかに多くて、それはどうも霞が浦の養殖鯉が逃げ出して来ているのではないかとと思うのです。私小さい頃は、鯉を釣ろうと思ったら1週間利根川に通って、それで1匹釣れば大したものだと言われておりました。今は魚がたくさんいる川も結構あるので、これもいろいろと考えてみなくてはならない問題と私は思っております。

先ほど治山、治水という言葉が出されました日本の森林であります、今日日本の森林の状態は、一番いい状態にあるというのが大学の森林の先生のご意見であります。将来危険なことはわかっているけれども、今は非常にいい状態で、これから悪くなるだろうということなのです。

これは、なぜかという、第2次大戦直後の日本の山というのは、見る影もなかったということです。戦争中、船をつくろうというので木を切ってしまって、最後は松の根っこからオイルをとって、それでゼロ戦を飛ばそうと、松の根っこを一生懸命抜かされた覚えがあるのです。それで、抜いた松の根っこはそこいらにほうってある内に終戦になってしまったという状況でありましたけれども、それだけ山を荒らしてしまったという状況もあります。

それに比べたら70%に近い森林率を持っておるとい国は、世界でもうらやましがられているところにあるかと思えます。将来どうなるかという問題がありますけれども、今日日本の森林が世界で最悪だという状況では決してないと

いうことであります。

ただし、どうも日本の森林はとっておいて、東南アジアから木を輸入して、大変に不評を買っているという面もありますので、それは自分の国の材木を活用した方がいいのではないかと思います。

なお、去年、タイの南のマレー半島の方で、大変な土石流の大災害が起こりました。これは森林を切ってしまったために起きた災害だということでしたが、どうもそうではなくて、これは一種の地球規模の災害なのです。どういうことかというと、ご承知のとおりエイズというこわい病気が世界的にはやっております。そのため天然ゴムの需要が猛烈に増大したのです。それで天然ゴムをつくるのは、タイとマレーシアですから、タイの方で需要に追いつかないので、ゴム林というのは20年経ったら植えかえなくてはいけないところが、15年ほどで植えかえを始めました。植えかえを始めて、よく苗木が育っていないところに集中豪雨があって、一遍に崩れてしまったというのがその理由です。だから、エイズによる洪水だといって差し支えないのです。

タイの人にしてみると、どうも世界規模の病気のために大被害をこうむったということになるのですが、その災害復旧にはタイの王女様で、よく日本にもこられる方ですが、シリントーン王女が先頭に立ってやっておられるのです。これは建設省でもう既にお手伝いにかかっているはずですが、私らも航空写真その他を使っていろいろお手伝いをしたいというように考えています。

そういうわけで川というものは、いろいろな性能、機能をもっております。それで、昔からいろいろな出会いの場をつくってきたわけで、皆様方ぜひ、川をきれいにする以上に住民の連帯感が育つという効果があるとお考え頂きたいと思います。

ちょうど行政の方もおられるので、ぜひお願いをしたいのですが、ボランティアというのは、実は一番大変な行為であります。お金を貰って仕事でやるというのは、当然のことです。無料でやるということは、実は英語でプライスレスという言葉があるのです。これは価値がないということではなくて、価値をはかることができないという意味なのです。

例えば100万円だけ川をきれいにするというのは、100万円だけの仕事なのですが、川をきれいにするという仕事は、じつは100万円どころか、1億円の価値があるのかもわかりません。気をつけないと行政の方はどうも毎年ただでやってくれるのに、今年はやってくれないのはけしからんではないかということになりかねません。気をつけないと、好意が義務になってしまってこれはうまくいきません。

最後になりますが、川の触れ合いの話をひとつしたいと思います。それは、漢の時代に馬援という将軍がおりまして、この人が若いころ朱勃という人と大変な親しい友人でありました。二人とも役人になりましたが、馬援という人は一風変わった人でありましたが、出世をいたしまして漢の将軍になりました。

将軍になるといろいろな人がいろいろな会にくるわけですが、あるとき、その馬援がいろいろな人に面会をしておって、つい話し込んでいて時を忘れました。後一人会う人があったというので、今でいうと6時か7時ごろになってあわてて「後一人はだれだ」というと、「後一人は朱勃という方ですけれども、馬援さんも忙しいだろうからと言ってお帰りになってしまいました」というので、馬援は大変驚いて、これは朱勃に悪いことをしたと思いました。

朱勃は地味な人だったので、別に出世はしていなかったのですけれども、馬援は大変大切に思っておりました。馬援が大変年をとってから、南の方に反乱が起きてそれを鎮圧に、馬援が自分で行くと言い出したのです。漢の光武帝は「おまえは年をとっておるので、やめろ。」と言ったところが、自分はもう80歳を過ぎているが、こんなに元気だと言って馬に乗って見せました。これは大変にかくしゃくたるものだと言った光武帝がはめてそれから「かくしゃく」という言葉が中国で流行しました。

この馬援が亡くなったあと、悪口をいう人が出てきました。これは、馬援が南の方に行ったとき、ハトムギをたくさん持って帰ってきました。ハトムギなんかにどこにでもあるものですけれども、馬援はたまたまそのハトムギが非常に立派なハトムギだったので質素な人ですから、これは光武帝にも献上しようと思って、実際献上したわけですが、ハトムギをたくさん持って帰ってきたのです。

みんながこの車の中は何の宝だと聞いたときに、馬援が、いやこれは大切な宝だと冗談を言ったのです。それがまずくて、馬援というのは悪いやつで、宝物をたくさん取って帰って隠してしまったと言ったのです。

光武帝はそれを聞いて大変に怒って、馬援は墓に葬ってはならない、又馬援の親戚も全員失脚させるということになりました。逆らうものは死刑であるということになったところが、朱勃がやって来て、光武帝のところに出て、これは絶対にけしからん話であり、馬援というのは正しい人間であると光武帝にずけずけ言ったのです。

光武帝は賢い人でしたから、これを聞いてしまったと思ったのですが、やめるわけにはいかないから、わかった、わかった、おまえもう帰ってくれと言って、しばらくして馬援の名誉回復をしたということがあります。

実にこの馬援と朱勃は、仲がよかったのですけれども、若いころ一緒に勉強をただけで、年とってから、一度も出会うことがありませんでした。一度だけ馬援が最後に出征していくときに、川を渡るわけですが、その川を渡るので、馬援が、馬に乗って指揮をして、ここを渡れ、ここ渡れと叱咤激励をして、これは大将の腕一つによるのです。兵隊をみんな安全に渡したところが、だれか岸の小高いところで馬に乗ってずっと見ていた人があるのに馬援は気がつきました。馬援は見た途端にあれは朱勃だということがすぐにわかりました。ああいうところでじっと見ていてくれるのは朱勃に違いないのです。馬援が槍を上げますと、朱勃の方も手を挙げて答えました。それから二人は、出会うことはありませんでした。

これから皆様方もいろいろな形で川における出会いがあると思います。川はそういう所です。昔から川は数多くのドラマを作って来ましたし、又、これからも作って行くことでしょう。是非皆様の創意によって川のドラマを作っていただきたいと思います。

これで私の話を終わらせていただきたいと思います。（拍手）

著者紹介

筑波大学教授 椎 貝 博 美

昭和 9 年生。36年東京大学大学院修士課程修了。東工大助教授・アジア工科大副学長を経て現職。土木工学・河川に関する論文多数。東南アジア河川事情にも精通。河川審議会専門委員・科学技術庁参与・学術審議会専門委員・日本河川協会理事として活躍中。